

杜甫と白居易の病態比較

—特に白居易の服石の検証—

中醫クリニック・コタカ 小高修司

杜甫(712-770, 59歳・字子美・生地不詳)に比して、白居易(772-846, 75歳・字樂天・太原人)であるが、16年ほどの寿命に差異がある。両者の疾病に関する考察は既に発表してある(1)(2)(3)が、本稿の目的はそれを踏まえつつ、寿命の差異が生じた理由を、特に鉱物薬(水銀、鉛、鍾乳石など)の服用の有無を含めて考えることにある。杜甫は前著でも明かにしたが重金属を含む服石の可能性が高いが、白居易に関しては一時使用していたとの説があるものの、詳細は不明である。詩作に見られる症状を検討することで、この問題を明らかにしていきたい。

我々の生命力は、後天的な養生と共に、両親から与えられた先天的な力(これを「先天の本」という)に影響される。それぞれの問題を検証していこう。

1, 先天の本＝「腎」の状況について

杜甫の父親(杜閑)は杜甫誕生時に30歳であり、70歳以上の寿命であったと考えられることから父親の「先天の精氣(腎精)」に問題はない。一方母親(崔氏)は若死にし、杜甫は姑に育てられた(黄鶴語)と記されており、しかもそれは杜甫が6, 7歳前のこと(聞一多語)といわれることから、母親の腎精は弱かったことが示唆される。

一方白居易の父は66歳で死亡とされることから先ず腎精の力に大きな問題はなかったと考えられるのに対し、母親は15歳で嫁ぎ、18歳で次男・白居易を生んでいる。兄の年齢を考えれば16, 7歳で初産であろう。『医心方』(丹波康頼撰著, 984年成書)巻二十一に「今は、婦人が早婚なので、腎の根本がまだしっかりしないうちに子を産み、腎を損傷してしまう。それゆえ今の婦人が病むと、必ず難治となる」とある通りである。また不幸な結婚、9歳の子供を亡くしたこと、生活苦などを背景因子として、重い鬱病があったという指摘(謝思煒)もされている。一般に鬱病を発症する基礎体質として、心・肝・胆の氣血不足が考えられる状況であるが、それにもかかわらず、四人も出産したことは生理学上大きな負担であり、こういった生活環境の結果として腎が傷つき、その結果として子供達にも十分な腎精を与えられなかったことは十分に示唆される。

これらの論理の根拠は『素問』上古天真論篇第一にある。

岐伯曰、女子七歳、腎氣盛、齒更髮長、二七而天癸至、任脉通、太衝脉盛、月事以時下、故有子、三七腎氣平均、故眞牙生而長極、四七筋骨堅、髮長極、身體盛壯、五七陽明脉衰、面始焦、髮始墮、六七三陽脉衰於上、面皆焦、髮始白、七七任脉虚、太衝脉衰少、天癸竭、地道不通、故形壞而無子也。

丈夫…五八腎氣衰、髮墮齒槁、六八陽氣衰竭於上、面焦、髮鬢頰白、七八肝氣衰、筋不能動、天癸竭、精少、腎藏衰、形體皆極、八八則齒髮去、腎者主水、受五藏六府之精而藏之、故五藏盛乃能寫、今五藏皆衰、筋骨解墮、天癸盡矣、故髮鬢白、身體重、行步不正、而無子耳。

杜甫も白居易も共に若年より身体が弱く、共に母親の病弱＝腎精不足を背景とする虚弱が示唆される。さらに両者の寿命に十六歳という大きな差が生じた理由を考えてみたい。

杜甫晩年五五歳以降の詩に見られるように、杜甫に若い妾が居たとする説(黒川)を勘案すれば、老齡にはふさわしくない過度の性生活(子供が数人いたことから解る)が一層腎を傷つけた可能性は否定できない。杜甫が大暦二(767)年、56歳以降に悩まされる「鬢」「髮落」「白髮」も腎と関わる。

夫失精家、少腹弦急、陰頭寒、目眩、髮落、脉極虚芤遲、爲清穀亡血失精。

(『金匱要略』血痺虚勞病脉證并治第六)

腎氣通于耳、腎和則耳能聞五音矣。 (『靈枢』脉度第十七)

腎之合骨也、其榮髮也。 (『素問』五藏生成論篇第十)

次に「外的な病気の要因(=外因)」について考えてみよう。

2, 外因について

気候などの外的環境(風寒暑湿燥火)を「六気」と呼ぶが、その中で、それが本来の時候に外れるものであったり、本来の時候であっても異常に強力であったりする場合に、それを病因と見なし「六淫」と呼ぶ。

両者共に後述する飲食の不摂生、特に飲酒や喫茶の習慣が多く、留飲宿食と呼ばれる病態を招いていたと考えられる中で、杜甫の場合、江南の地に居住し、しかも船上生活が多かったことは、外的環境における湿邪が白居易よりも多かったと示唆される。結果として体内外の多湿状態が感応し合い、種々の病態を起こす危険性が高かったと考えられる。

3, 内因について

日常的に感情(大まかに喜怒憂思悲恐驚の七種類とし「七情」という)は変化するものであるが、その情動が非常に強かったり、長時間持続する場合は病因となり、「七情内傷」と称する。五臓を例に挙げれば、肝一怒、心一喜、脾胃一思、肺一悲、腎一恐のように、それぞれが異なる感情と密接に関連すると考える。

白居易の生涯は二十一歳の時に第四弟を亡くして以来、親族・友人と実に多くの死と関わっている。当然このことが自分の体弱と相まって、無常観を抱くに至ったであろう。さらに母と娘を亡くしたときの作詞「四十にして未だ老を爲さざるも、憂に早衰を傷らるを悪む。前歳には二毛生じ、今年は一齒落つ。形骸日に損耗し、心事同じく蕭索たり。」(卷十自覺二首)に見られるように、憂悲による肺の損傷(「憂悲傷肺」)を初めとして、五臓六腑の傷害(つまり「七情内傷」)を引き起こしたことは十分考えられる。

一方、杜甫は根本に腎精(腎気)の脆弱があるために物事に恐れを感じやすく、また相生関係にある肝・胆は、母である腎からの援助を十分に受けられず気血が不足しがちになる。肝の気血不足により些細なことでイライラし怒りっぽくなり、一方で気落ちしやすくなる。胆気不足は「胆怯^{たんきょう}」と呼ばれる病態を起こし、驚きやすく怯えやすくなる。また腎は、相克関係にある心を十分抑制し得ず、心火上炎という病態になり、過剰に喜びやすくなり、また熟睡が出来ず夢が多くなる。種々の点から情緒的に不安定であることは、別の見方をすれば感性が鋭く芸術家としての才能に恵まれることになったと云えよう。

内因面から両者の比較を行った結果云えることは、官吏登用に関しては、白居易の方が

遙かに順調であり、杜甫の方が精神的ストレスはより強かったと見なせる。上記したように腎は両者共に不足気味であり、臓腑相関で母子関係にある「肝」も弱くなり、ストレスに過剰に反応し、怒りっぽくなり、一方で逆にちょっとしたことで気鬱になりやすかったと考えられる。白居易が齋戒などにより精神の安定を得ることに努めていたことには大きな意義があったであろう。

外因、内因以外の病因、飲食の不摂生、不適切な性生活などを「不内外因」と総称する。

3, 不内外因について

飲酒と喫茶習慣は水分処理（排泄）機能の低下を伴えば、痰飲・湿邪を生むことは明らかである。水分処理は小便（腎）、大便（脾胃）それに発汗（肺）により行われる総合作用である。痰飲の発生に外因（六淫）、内因（七情内傷）、不内外因（飲食不節、嗜欲無度）が関連するとする説は、以下の通りである。

人之有痰飲病者、由榮衛不清、氣血敗濁凝結而成也。内則七情汨亂、臟氣不行、…外有六淫侵冒、玄府不通、…或飲食過傷、嗜欲無度、叫呼疲極、運動失宜、津液不行、聚為痰飲、屬不内外因。（『三因極一病証方論』宋1174、陳無鐸）

杜甫の多くの疾病の病因として痰飲は重要な働きをしていたと考える。もちろん多年にわたる窮乏に依拠する不十分な摂食、戦乱などによる逃避生活、更には怒り、懼れ、悲しみなどの心的ストレスが状態悪化に拍車を掛けたことは間違いないであろう。更にそれを増悪したものとして、鉉物薬の服用について考える必要がある。

4, 燒丹について

『抱朴子』内篇卷之四・金丹の「丹砂之を燒きて水銀と成り、積變して又丹砂に還成する。是也。」の記述のように、赤い固体の朱砂から液体の白い水銀に相互変化するということから、変化と回帰という性質に基づいて身体の若返りが可能になると考える。『神農本草経』の丹砂の記述は以下の通り。

味甘微寒、生山谷、治身體五藏百病、養精神、安魂魄、益氣明目、殺精魅邪惡鬼、久服通神明不老、能化爲汞。

魏晉南北朝以来、士大夫階級などに服用が流行した「寒食散」（「五石散」はその一種）に関しては、既に詳細な研究が為されている。杜詩の「轉蓬憂悄悄、行藥病涔涔」（「風疾舟中伏枕書懷三十六韻、奉呈湖南親友」）に見られる「行藥」は、石薬である寒食散の服用後に、体熱発散のために必要な散歩を意味する可能性があるが、是に妥当するかどうか。一般に杜詩に詠われている「寒食」は、『荆楚歲時記』にある「冬至後百五日で、風雨が強いことが多い時期、清明の二日前」という暦上の詞とされている。清明（せいめい）とは二十四節気の1つで、4月5日ごろを指すか、或いはこの日から穀雨までの期間を指す。それ故ここでの「行藥」が服石の傍証になると確定することは出来ない。

ただ次の紫金丹は『杜詩詳註』など種々の詩集のいずれでも一回に限って使用が見られるが、服石を行っていた重要な傍証となりうる。『杜詩詳註』卷十三（翰林院編修仇兆鰲撰）「將赴成都草堂途中有作，先寄嚴鄭公五首」に見られる。

生理只憑黃閣老，衰顏欲付紫金丹。

この詩の表題に付されている注(4)によると、本詩が作られたのは広徳 2 年（764 年、杜

甫 53 歳) 春である。

紫金丹は多くの文献に見られ、いくつかの種類があったようであるが、『太平惠民和劑局方』(1148年改名して刊行)に震靈丹(一名紫金丹)として見られる処方薬能及び処方内容を注記(5)する。

その他、服石と関連すると思われる症状を記した詩作に関しては、既に文献(3)に於いて発表してある。紫金丹もそうだが、問題となるのは水銀、鉛といった重金属を含む石薬を服用していたと思われることであり、当然重金属中毒という重篤な病態を惹起し寿命に影響したと示唆されることである。

5. 白居易の服石について

従来の見解としては、白居易は江州貶謫の頃の数年間のみ外丹法を試みたとされている。彼の詩にもたびたび詠われている如く、いわゆる水銀や鉛などの重金属を用いる「丹薬」の製造には失敗し、結果として重金属中毒にならずに済んだと考えられる。しかし全ての服石を止めたかどうかは明らかにされていない。そこで種々の病態・症状などからその服用の可否について検証してみた。

六十三歳の時の「暁に雲英を服す」(卷三十一早服雲母散)や七十一歳の時の「雲液六腑に洒みる」(卷三十六對酒閑吟、贈同老者)、また年齢は不明だが、「朝に雲母散を餐し、夜に瀝精を吸沆す。」(卷一夢仙)や「一匙の雲母粉」(卷七宿簡寂觀)の記述が見られることから雲母の服用は継続していたと考えるべきであろう。

『医心方』(丹波康頼撰著、984年成書)卷十九・服石發動救解法第四には、服石により如何なる副作用が生じるかと、それへの対処法が列記されている。また『諸病源候論』(610、巢元方)卷六・寒食散發候、『千金翼方』(唐・孫思邈、681年脱稿)卷二十二飛煉・服諸石薬及寒食散已にも同様の記述が見られる。一方『外台秘要方』(王燾、753頃)卷三十七・乳石論以降には薬石の種類毎に詳細な対処法が記されている。

これらの書籍に挙げられている具体的症状が、どのように彼の詩作に見られるかを検討した。

(1) 「蒼」「瘡」について

「蒼」は『医心方』に以下の記述として見られる。

「身體發癢瘡堅結坐寢處久不自移徙」、「脚指間生瘡」

「瘡」は『五十二病方』(馬王堆三号前漢墓帛書、1972-74出土)・諸傷の項に「烏喙(=^{うたく}烏頭^{うず})の矢毒による中毒や瘡、毒蛇による咬傷などによる癢痕・癰瘡を指す」との記述が見られる。また古代の粗造な鍼による傷口も指したようである。白居易は「蒼瘡」として詠うこともある。

卷 45 (1486) 與元九書「二十已来…口舌成瘡 手肘成胝」

卷 15 (0807) 渭村退居、寄禮部崔侍郎、翰林錢舍人詩一百韻(四十三歳)「仍憐病雀瘡」

卷 11 (0558) 蚊蟆(五十歳頃)「久則瘡瘡成 瘡成無奈何」

卷 26 (2652) 酬鄭侍御「多雨春空過詩三十韻」(五七歳頃)「浸淫天似漏 沮洳地成瘡」

卷 22 (2664) 和『李勢女』(五十八歳)「忍將先人體 與主為疣瘡」

卷 30 (3015) 二月一日作贈韋七庶子(六十四歳)「去冬病瘡瘡 將養遵醫術」

卷 37 (3618) 病瘡(七十歳頃)「脚瘡春斷酒 那得有心情」

このように二十歳以来「蒼」病があったというが、若年のはいわゆる口内炎のようで、その原因は多くストレスであったと思われる。それに対し中年以降に何故このように感染症をたびたび引き起こすのかは大いに疑問とするところで、慢性的な免疫力の低下が疑われる。特に七十歳頃の詩作に見られる「脚瘡」は、まさに『医心方』の記述通りで、服石の副作用と考えることが可能である。

(2) 「眼痛」について

「眼昏」の記述は多く、初めは巻9(0424) 白髪(40歳?)「書魔昏兩眼」や、巻6(0243) 答卜者(43歳頃)「病眼昏似夜」などがある。そして44歳の時の詩二篇、巻15(0858) 病中荅招飲者「不縁眼痛兼身病」と巻15(0883) 舟中讀元九詩「眼痛滅燈猶闇坐」に眼痛の記述があることを考えれば、緑内障の疑いは強い。しかし後年五七歳の時の詩・巻26(2647) 和劉郎中『曲江春望』見示「眼痛忌看花」は、緑内障としては視野狭窄や失明に至らないという経過の長さを配慮すれば、可能性として『医心方』服石の副作用にある「目痛如刺」を考慮すべきかも知れない。

元来「眼」症状は、「肝」との関連が強く、ストレスなどが悪化要因として大きいことが知られている。

東方青色、入通於肝、開竅於目藏精於肝、其病發驚駭。(『素問』金匱真言論篇第四)

五十歳以降は齋戒に努め心身を安定させ、飲酒も控えてきた白居易としては、肝の鬱結状態の緩解に結びつき、眼症状の緩解を得ると思われる。確かに五十七歳の詩以降に眼症状を云うことが無いことは、仮に服石を続けていたとすると疑問が残る点である。ただ最も服用が示唆される「雲母」や「石鍾乳」には、『神農本草経』の薬効に「明目」があり(6)、逆にそのことが服石の可能性を否定できない理由でもある。

(3) 「癢」(=痒)について

関連する詩作は以下の通りである。

巻15(0880) 白口阻風十日(44歳)「蚊蚋和煙癢滿身」、

巻38(1411) 宣州試射中正鵠賦「使技癢者出於羣」

巻21(2207) 宿東亭曉興(五十二歳頃)「頭癢曉梳多 眼昏春睡足」

『諸病源候論』巻六・寒食散發候に「頭面身癢瘙」が挙げられている。また『医心方』服石に「蔭囊臭爛、坐席厚、下熱故也」とあるが、これは『諸病源候論』巻三・虚勞陰瘡候に「癢搔之則生瘡」とあることから「癢」は服石の副作用とも見なせるが、飲酒・喫茶の多飲がもたらした結果の湿熱が病因とも考えられる。

これも五十二歳以降見られないことは服石期間の限定を示唆せざるを得ない。

(4) 「眩」「頭風」について

同じく『医心方』服石と、『諸病源候論』巻六・寒食散發候に「眩冒欲蹶」が挙げられている。

巻6(0264) 游悟真寺詩一百三十韻(四十三歳)「目眩手足掉」

巻7(0306) 登香爐峰頂(四十六、七歳)「目眩神恍恍」

巻17(1009) 江樓夜吟元九律詩成三十韻(四十七歳)「頭風當日瘥」

巻24(2458) 小舫(五十五歳)「白蘋香起打頭風」

巻24(2477) 眼病二首の第1首(五十五歳)「醫言風眩在肝家」

巻24(2484) 九日寄微之(五十五歳) 眼闇頭風事事妨

卷 22 (2258) 和「寄樂天」(五十八歳)「目眩心忽忽」

卷 28 (2871) 病眼花 (五十九歳)「頭風目眩乘衰老」

卷31(3065) 酬舒三員外見贈長句 (六十二歳)「頭風不敢多多飲」

卷 35 (3408) 病中詩十五首 (六十八歳)「體癩目眩」

卷 35 (3409) 初病風 (六十八歳)「頭旋劇轉蓬」

卷 36 (3525) 病中宴坐 (六十八歳)「頭眩罷垂鈎」

一般に眩暈の大きな病因は「痰濁阻竅」であるので、飲酒喫茶習慣の多い白居易もその結果としての眩暈であることは否定できない。ただ晩年まで症状が持続していたことは、可能性として服石の副作用を残しておきたい。

(5)「蹇」「腰痛」について

『医心方』に「關節強直不可屈伸」「百節酸痛」「腰痛欲折」「偏臂脚急痛」など関連する副作用が列記されている。脚萎えの意である「蹇」の詩作を見ていこう。

卷 10(0465) 寄元九「不因命多蹇」

卷15(0808) 酬盧秘書二十韻 (四十三歳頃)「蹇步尚徘徊」

卷20(1331) 醉題候仙亭 (五十一歳)「蹇步垂朱綬」

卷 23(2378) 酬楊八 (五十三歳)「我因蹇步稱閑官 閉門足病非高士」

卷 35 (3423) 歲暮病懷贈夢得時與夢得同患足疾 (六十九歳)「同教步蹇有何因」

卷 35 (3437) 強起迎春、戲寄思黯 (六十九歳)「杖策人扶廢病身…他時蹇跛縱行得」

卷 36 (3539) 夢上山時足疾未平 (六十八歳)「晝行雖蹇澁」

卷 45 (1486) 與元九書「策蹇步於利足之途」「況詩人多蹇」

次に「腰」に関する詩作を挙げよう。

卷 5 (0203) 酬楊九弘貞長安病中見寄「折腰我營營」

卷 17 (1012) 元九以緑絲布…詩報知「折腰無復舊形容」

卷 20 (1343) 晚歲 (五十一歳)「擘帶知腰瘦」

卷 24 (2459) 馬墜強出、贈同座 (五十五歳)「足傷遭馬墜 腰重倩人擡」

卷 24 (2460) 夜聞賈常州、崔湖州茶山境會、想羨歡宴、因寄此詩 (五十五歳)「蒲黃酒對
病眠人時馬墜損腰、正勸蒲黃酒」

卷 24(2490) 酬別周從事二首の第 1 首五十五歳)「腰痛拜迎人客倦」

卷 28 (2822) 自問 (五十八歳)「佩玉腰無力」

卷31(3097) 答夢得秋日書懷見寄 (六十二歳)「腰瘦帶先知」

卷 33 (3304) 六十六 (六十六歳)「瘦覺腰金重」

卷 35 (3446) 春盡日、宴罷感事獨吟 (六十九歳)「金帶縋腰衫委地」

卷 36 (3577) 酬南洛陽早春見贈「寒縋柳腰收未得」

卷 37 (3635) 閑眠「暖牀斜卧日曛腰」

腰痛や腰無力は老化に伴う腎虚や湿邪内蘊による場合にも起きる症状であるが、五十五歳の時の落馬による腰損傷は、それ以後大きな影響を残したと思われる。

6, まとめ

1, 杜甫晩年五五歳以降の詩に見られるように、杜甫に若い妾が居たとする説(黒川)を勘案すれば、過度の性生活が一層腎を傷つけた可能性は否定できない。

2, 杜甫の場合、江南の地に居住し、しかも船上生活が多かったことは、外的環境における湿邪が白居易よりも多かったと示唆される。結果として体内外の多湿状態が感応し合い、種々の病態を起こす危険性が高かったと考えられる。

3, 杜甫の多くの疾病の病因として痰飲は重要な働きをしており、さらに不十分な摂食、戦乱などによる逃避生活、更には怒り、懼れ、悲しみなどの心的ストレスが状態悪化に拍車を掛けたことは間違いないであろう。

4, 杜甫は紫金丹をはじめとして水銀、鉛といった重金属を含む石薬の服用の可能性が高く、当然重金属中毒という重篤な病態を惹起し寿命に影響したと示唆されることである。

5, 以上の諸点に於いて杜甫は白居易より短命であったことが説明できる。

6, 白居易は齋戒などにより精神の安定を得ることに努めていたことには大きな意義があった。

7, 白居易の服石に関しては、雲母の関する自詠を含め種々の病態の関連が示唆される。なかでも「蒼・瘡」は服石の副作用と考えることが可能である。七十歳頃の詩作に見られる「脚瘡」は、まさに『医心方』の記述通りであり興味深い。

文献及び注

(1) 小高修司：白居易（楽天）疾病攷、日本醫史学雑誌49(4)615-636, 2003

(2) 小高修司：白居易「風痺」攷、白居易研究年報7:169-188, 2006

(3) 小高修司：杜甫疾病攷、中唐文學會報 16:1-25,2009

(4) 鶴注此廣德二年春自閬州歸成都中途所作。唐書嚴武傳寶應元年自成都召還拜京兆尹明年為二聖山陵橋道使封鄭國公遷黃門侍郎廣德二年復節度劍南朱注舊書云武再尹成都節度劍南破吐蕃加檢校吏部尚書封鄭國公與新書不合以此詩題證之新書為是。

(5) 大治男子真元衰憊、五勞七傷、臍腹冷疼、肢體酸痛、上盛下虛、頭目暈眩、心神恍惚、血氣衰微、及中風癱緩、手足不遂、筋骨拘攣、腰膝沉重、容枯肌瘦、目暗耳聾、口苦舌乾、飲食無味、心腎不足、精滑夢遺、膀胱疝墜、小腸淋瀝、夜多盜汗、久瀉久痢、嘔吐不食、八風五痺、一切沉寒痼冷、服之如神。

処方内容：禹餘糧、紫石英、赤石脂、丁頭代赭石各四兩。滴乳香（別研）、五靈脂（去沙石、研）、沒藥（去沙石、研）各二兩、朱砂（水飛過）一兩上件前後共八味、并爲細末、以糯米粉煮糊爲圓、如小雞頭大、晒乾出光。

(6) 『神農本草經』の記述。

雲母：一名雲珠、一名雲華、一名雲英、一名雲液、一名雲沙、一名磷石、味甘平、生山谷、治身皮死肌、中風寒熱如在車船上、除邪氣、安五藏、益子精、明目、久服輕身延年、

石鍾乳：味甘温、生山谷、治欬逆上氣、明目益精、安五藏、通百節、利九竅、下乳汁、